

8月24日説教(隅野徹牧師)短縮版「受けるより与える方が幸いと教える主」(使徒20:17～35)

ここでパウロが「告別説教の最後で、受けるより与える方が幸いだ」と言っているのは、「人間関係が上手くいくために、与えることが大事だ」といっているのでは全くないのです。その証拠となるのが、35節の最初の言葉だと私は思います。「弱い者を助けるように」というこの言葉です。

「弱い者」とは、必ずしも社会的弱者という意味だけではなく、もとの意味は「お返しのできない者」という意味だそうです。つまりは、人が何かしてくれることに対して「金銭的なお返しができない」人のことです。現在の社会は、見返りが期待できるかどうか、将来的に投資した分を回収できるか…といった観点で人間や国や社会を見ることが多いと感じます。その結果「切り捨てられ、大切にされない命」も増えていると感じます。しかしパウロは「すべての人の命を大切にする。愛する」の意味で「受けるのではなく与えること」の大切さを説き、そういう生き方が幸いなのだ」といっているのです。遺言のようにして力を込めて語っているのは「わたしが見返りに関係なくあなたたちを大切にしたように、あなたたちも見返りの愛で、隣人を愛していくところに幸せがあるのです」と、伝えたかったからだとは理解しました。

神・キリストに齒向かい、大きな罪を積み重ねていたパウロ。本当なら罪の報いとして滅びに向かうしかなかったパウロが、まさに「無償の愛、一方的な憐れみの愛」によって罪から救い出されたのです。その「一方的な憐れみ」「アガペーの愛」を受けたパウロだからこそ、今度は自分が「見返りを求めず、キリストの福音を無条件に、すべての人に伝えるようになったのです。そして、その思いは次の人々に受け継がれたのでしょう。パウロが福音の種をまいた、地中海沿岸の地域では、その後ローマ帝国による激しい迫害、またユダヤ教信者からの大きな迫害がありました。しかし、迫害の中でも相手に仕返ししたりせずに「じっと、キリストの愛に生きた」のが、その地域のクリスチャンたちでした。やはり、迫害のような大変な試練の中でも、それでも「しっかりと立ち続けることができるキリスト信仰」は、「自分が、無償で神・キリストの愛を受けた。価値なき者をそれでも罪から救い出して下さった」ということを心に深く刻んだ信仰なのではないでしょうか。(終)